

バッジ・ウィルソンの世界：「戦争」と物語のパターン

荒木陽子

はじめに

作家バッジ・ウィルソン (Budge Wilson) は、1927年に北米でも有数の規模と歴史を持つ軍港を抱えるノヴァスコシア州ハリファックス (Halifax, Nova Scotia) に生まれた。⁽¹⁾ 少女時代にホームフロントで第二次世界大戦を経験したウィルソンは、筆者との2011年8月のインタビューで語るとおり、戦争について書くことへの執着を隠さず、くりかえし戦争の時代を生きるノヴァスコシアのこどもたちの物語を書いている。デボラ・エリス (Deborah Ellis) やシャロン・マッケイ (Sharon McKay) など大戦の経験のない世代のカナダ人児童文学の作家たちが、国外の紛争地域を題材とする作品を出版し注目を浴びているのとは対照的である。⁽²⁾ 本稿はウィルソンの作品のうち、軍事的戦争をテーマの一つとする物語を検証し、そのウィルソンの文学世界における発展過程を考察するとともに、そこに軍事的な戦争をテーマとしないウィルソンの作品と共通するひとつの物語のパターンを見出すことを試みる。

I. 『13歳 いつも一緒』中の祖母の日記：戦争をテーマとした物語の原型

ウィルソンは1989年に出版された『13歳 いつも一緒』 (*Thirteen Never Changes*, 以下『13歳』と省略) において初めて本格的に戦争というテーマに取り組む。⁽³⁾ 同作品は、1984年に出版が開始されたウィルソンの少女向け児童文学作品群、ブルー・ハーバー・シリーズ (Blue Harbour Series, 全5巻) の第4巻であり、その時代設定は1989年である。ここでシリーズ第1巻『史上最高/最悪のクリスマス・プレゼント』 (*The Best/Worst Christmas Present Ever* 1984) において10歳だった主人公のロリンダ (Lorinda Dauphinee) は13歳に成長し、ハリファックス出身の母方の祖母ローラ (Laura Davison) の形見の日記を読むことにより、ローラが同じ年だったころ、すなわち1940年頃のハリファックスについて学ぶ。⁽⁴⁾ 当時13歳だったローラは作品の現在である1989年に62歳で亡くなることから、ウィルソンと同じ1927年生まれである。⁽⁵⁾ ローラの例にみられる通り、ウィルソンはしばしば登場人物に対して、口に出せない考えや気持ちを日記や書簡に文字で表現するように仕向けるため、彼女の作品の中にはしばしば日記や書簡が組み込まれること、またジャニス・キュリック・キーファー (Janice Kulyk-Keefe) が指摘する通り、こうして「書く女性」が描かれること自体がカナダ沿海諸州の文学では非常

にまれであることには言及しておくべきであろう。⁽⁶⁾

『13歳』自体は戦争物語でも歴史物語でもなく、祖母の日記を読むことにより成長する少女を描く教養物語である。しかし、ロリンダはローラの少女時代の日記を読む形で、さらに読者はローラの日記を読むロリンダの物語を読むことにより、配給制、灯火管制、港一杯の船、潜水艦、魚雷、空襲警報、軍港都市ハリファックスの膨張、爆発事故、家族や知人の出征、戦死、イギリスからの疎開児童などのローラの経験した第二次世界大戦を追体験する。

ローラのさまざまな戦争体験のうち特に強調されるは、イギリスからの疎開児童 (English guest children) との交流であるから、本稿は作品中描かれるヒラリーのカナダへの移転と順応の過程に注目したい。ローラの家では疎開児童のヒラリー (Hilary Sutcliffe) を受け入れる。作品中イギリス人ヒラリーの「イングリッシュネス」は、イギリス英語、階級意識、感情表現の否定などとしてステレオタイプ化されるが、⁽⁷⁾ 彼女はローラとの交流の中で次第に「カナダ化」し、イングリッシュネスを喪失していく。そして、ウィルソンは作品中ヒラリーのカナダ化を感情表現の肯定やカナダ英語の獲得という形で表現する。⁽⁸⁾ ヒラリーのカナダ化は作品中では積極的な変化、すなわち「成長」として描かれるのみならず、ヒラリーのローラの兄ノーマン (Norman) との結婚という後日談に帰結する。⁽⁹⁾ 二人が結婚後イギリスに居住する筋書きは、それまでのカナダ化の言説と矛盾するような印象を与えるが、この結末をもってウィルソンは、カナダ・ナショナルリズムを越えて、戦争の影響力の双方向性を示唆している。

ここまでの説明では、新天地を経験しているのはヒラリーだけのように感じられるが、実はそうではない。受け入れる側のローラもアナポリス・ヴァレー (Annapolis Valley) の小さな町ウルフヴィル (Wolfville) から、カナダ沿海諸州最大の都市であり、海軍基地と港を見下ろす要塞 (City Citadel) を抱えるハリファックスに引っ越して日が浅く、新天地における生活への順応に苦労しているからである。ローラの家族の移転の理由は明確にされていないが、ウルフヴィルと比較して過密状態で生活しにくいハリファックスに戸惑うローラに対して、母が開戦後ハリファックスの人口が6万人から10万人に急増したことを説明しているから、彼らの移転もおそらく戦争を背景にしたものであることがうかがえる。⁽¹⁰⁾

ヒラリーやローラの例にみられるこどもの新天地への移転というテーマは、『13歳』に先駆けて、同シリーズの第3巻『ふるさとをはなれて』 (A House Far from Home) においても、父がテキサスで病氣療養するために、ロリンダと弟がオンタリオ州ピーターボロ (Peterborough) のおばのもとに一時的に引っ越しを余儀なくされるという形で取り上げられているため、本シリーズにおける重要なテーマの一つであると考えてよいであろう。⁽¹¹⁾ ロリンダは次の引用のとおり、第4巻でローラの日記を読む際、自らのオンタリ

オ体験をヒラリーのカナダ体験と重ね合わせることによって、時代背景の違いを越えて、「知らない土地で生活すること」について理解を深めていく。

「ああ、おばあちゃん」、彼女はささやく、「ちょっとぐらい変な奴でも、彼女にやさしくしてあげて」。彼女はマリオンおばさんのところで過ごしたつらい最初の数週間、ジェームスと二人ぼっちでオンタリオという新世界で孤独にさらされたときのことを思い出していた。ミルドレッドにはノヴァスコシア訛り、服、母親をマミーと呼ぶことをからかわれた。⁽¹²⁾

このように、ロリンダはイギリスとカナダにおける生活の違いをあげつらうヒラリーを苦々しく記録するローラの日記を読みながら、半世紀前の少女の体験に共感し、それを自らが生きる現代の問題として消化するのだ。

先に筆者は感情表現の方法の獲得がヒラリーのカナダ化の過程においてもつ重要性に言及したが、作中ウィルソンはベッドフォード湾 (Bedford Basin) で起こった火薬類を積んだ貨物船の爆発事故を契機として彼女にその機会を与える。この事故に接することで、それまで「35歳ぐらい」の大人のようにふるまい、人前で泣くことのなかったヒラリーは初めて声をあげて泣き、⁽¹³⁾ その開放感を、「ああ！ すごく気持ちよかったわ。残りの人生週に一回はあんな大泣きしようかしら」と表現するようになる。⁽¹⁴⁾ この場面の直後に、ローラが火災を起こした船を海軍が沈没させたのは1917年のハリファックス大爆発 (Halifax Explosion) のような大爆発を防ぐためであったことを解説していることは、ヒラリーもまた感情表現の方法を手に入れることによって、抑圧された感情の大爆発を回避することができるようになったことを示唆する。⁽¹⁵⁾

ここまでのヒラリーのカナダ化の過程をパターン化すれば「戦争 ⇒ 新環境への移転 ⇒ 葛藤 ⇒ 感情表現 ⇒ 新環境への順応」となる。しかし、ヒラリーの物語は、あくまで現代を設定としたシリーズの一作品に過ぎない『13歳』中の劇中劇に示されたサイドストーリーの域をでない。そこで筆者はウィルソンが『13歳』中の「ローラの日記」を、登場人物の名前を変え、詳細な歴史背景やサブストーリーを書き加えることによって、第二次世界大戦ホームフロントの歴史物語として全4巻のイジー・シリーズに発展させたのではないかと考える。次章では、ウィルソンがイジー・シリーズにおいて、どのように『13歳』で提示された上のパターンを歴史物語として発展させたのかを検証したい。

II. イジー・シリーズ：ローラの日記の発展と歴史物語化

イジー・シリーズの作品を考察する前に、同シリーズが収められるアワ・カナディア

ン・ガール・シリーズ (Our Canadian Girl Series) について簡単に説明したい。アワ・カナディアン・ガールは2001年よりペンギン・カナダ (Penguin Canada) が8~12歳 (juvenile) の少女を対象として出版している歴史物語シリーズである。同シリーズからは、2011年12月現在、ウィルソンの物語の中心であるイジー・パブリカヴァー (Izzie Publicover) を含めて、12人の過去のカナダを生きる少女を中心とする歴史物語が出版されている。物語はそれぞれ100頁前後の小冊子4巻から構成されるが、ペンギン傘下のパフィン (Puffin) は2010年以降既発の小冊子を少女ごとに一冊に再編纂した書籍も販売している。

物語の地理的舞台は「カナダ」の歴史を語るために、国内さまざまな地域に分散している。しかし物語の主人公はエスニシティには差異があるものの、大半は英語を話す白人で、白人以外の主人公は黒人のレイチェル (Rachel)、白人と先住民の混血であるメティス (Metis) のアンジェリーク (Angelique) のみである。また、シリーズの物語の時代設定はイギリス支配が決定的となる1760年代から1940年代までである。ここにみられる「偏り」から、シリーズの提供しようとしている「カナダの歴史」の性質がうかがい知れるが、シリーズの文化ポリティクスを考察することは本稿の目的ではないので別稿に譲る。⁽¹⁶⁾

イジー・シリーズは、第二次世界大戦中のノヴァスコシア・ホームフロントを舞台としている。13歳のロリンダの目を通して編集されたローラの描く短期間かつ断片的な戦争体験に比較して、1941年の年末から1945年までを舞台とし、シリーズ中で主人公が11歳から15歳に成長するイジー・シリーズでは、言うまでもなく第二次世界大戦中の少女の体験とそれを取り巻く環境をより広く深く描くことが可能である。

以下に検証する通り、ローラの日記とイジー・シリーズは多くの類似性を持つ。主人公のイジーは、ローラが移転先のハリファックスでヒラリーに出会ったように、ノヴァスコシア州サウス・ショア (South Shore) の架空の漁村グラナイト・コーブ (Granite Cove) から軍需景気に沸くハリファックス地域への移転を強いられ、そこでイギリスからの疎開児童パトリア (Patricia Witherspoon) と出会いともに成長する。このシリーズを超えたテーマの共有から、こどもの移転と新環境への適応というテーマがブルー・ハーバー・シリーズに限られるものではなく、ウィルソンの文学世界を貫く重要なテーマであることがわかる。

『13歳』ではローラのハリファックス移転の背景説明がほとんどなされないのに対して、シリーズ第1巻『イジー ——クリスマスらしくないクリスマス』(Izzie: *The Christmas That Almost Wasn't Christmas* 2002) および、第2巻『イジー ——トロンゲート号の猛威』(Izzie: *Trongate Fury* 2005) においては、イジーの引っ越しの理由は

戦争を背景とするものとして明確に位置づけられる。⁽¹⁷⁾ イジー・シリーズにおけるウィルソンの戦争描写は詳細である一方で、そこで取り上げられるトピック自体はローラの日記で触れられたものときほど変わらない。第1巻は、戦時下のハリファックスへの人口の集中、物資（特に燃料）の配給制にくわえて、連合軍側のコンボイや知人の戦死など激化しつつある戦争の影を描き、次巻におけるイジーのハリファックスへの移転へと物語をつなぐ。⁽¹⁸⁾ そして、ローラの家族が後に戦死するジェフリー（Geoffrey）という海軍の兵士を寄港のたびに家族のように迎え入れるように、第1巻の終わりには民間人であるイジーの家族と軍人の交流も用意されている。歴史物語としてはリアリティに欠ける展開ではあるが、イジーのクリスマス・パーティに、嵐で座礁した掃海艇から脱出したカナダ兵と、彼らの救命ボートに救われたドイツ軍の潜水艦の乗組員が合流するエピソードが付け加えられているのだ。⁽¹⁹⁾

シリーズが歴史物語としてのリアリティを増すのは、現実起こった事件が物語に組み込まれ、イジーの家族にも直接戦争の影響が及ぶ第2巻からといえよう。1942年の冬から翌年の春までを描く同巻では、ローラの父が第一次世界大戦で負傷した退役軍人として家庭にとどまるのに対して、家族がいることを理由に入隊を拒否されていたイジーの父が海軍へ入隊するという出来事を通して戦争の激化が伝えられる。兄の出征がローラの家庭にそれほど大きな影響を与えなかったのに対して、世帯主である夫を失った専業主婦のイジーの母は生活の糧を得るために、二人の子どもをつれて軍需景気に沸くハリファックス地域、正確にはより家賃が安く、ワーキングクラスの人々が多く暮らす隣町ダートマス市（Dartmouth）のウッドサイド（Woodside）地区への移転と就業を余儀なくされる。⁽²⁰⁾ このようにローラの日記では説明されることのない引越しの理由が描きこまれることによって、物語は歴史物語としてのリアリティを増す。

特に第2巻はヒラリーが経験した「戦争 ⇒ 新環境への移転 ⇒ 葛藤 ⇒ 感情表現 ⇒ 新環境への順応」のパターンが再び展開される点で重要である。転校生のイジーがパトリシアと出会うのはこのダートマスにおいてであるが、ローラのハリファックスへの順応の過程がほとんど描かれなかったのに対して、ここではイジーの新天地への適応も描かれる。程度の差はあれイジーにもパトリシア同様の困難があったことは、服装の違いや英語に他の子どもにはないアクセントがあることをからかわれる際に、「彼女もパトリシアもどちらも他のみんなとはちがっていた」と、二人が同列に並べられることにより強調される。⁽²¹⁾

さらに注目したいのは、ウィルソンがヒラリーの感情表現を誘発するための装置として用いたベッドフォード湾における真夜中の爆発事故を、ヒラリー同様にやはり階級意識とイギリス的価値観にとらわれ、泣くこともよしとしない疎開児童として描かれるパトリシアの感情表現手段の獲得、そしてイジーとの友情の深化のきっかけとして再び用いて

いる点である。⁽²²⁾ この爆発事故およびその結果であるパトリシアの感情表現の重要性は、彼女が第2巻のサブタイトルを「トロンゲート号の猛威」とし、この事故について文末に3頁にわたる註を付していることが明示する。⁽²³⁾ また『13歳』中の爆発事故があくまでこの事故をモデルとしたフィクションである可能性が高いのに対して、ここでは歴史物語らしく作品中の時間軸を作品外の世界と合わせることにより、この爆発事故が1942年4月9日にベッドフォード湾で起こったTNTを積んだイギリスの貨物船トロンゲート号の爆発事故であることを示し、1945年の原子爆弾投下以前は世界最大の爆発事故であったハリファックス大爆発とリンクし、その重要性を強調する。⁽²⁴⁾

また、ローラの日記がヒラリーのイギリスにおける生活の描写に踏み込まない一方で、イジー・シリーズ第3巻『イジー——パトリシアの秘密』(Izzie: Patricia's Secret 2005)では、トロンゲート号の爆発事故をきっかけに自分の気持ちを表現しはじめたパトリシアが、イギリスにおける生活を明らかにしてゆく。パトリシアは貴族の血を引く母を持つものの父は犯罪者であるという自分の素性を打ち明け、イジーの提案に従い音信不通になっていた父と文通を始めることにより、自己表現をさらにすすめる。⁽²⁵⁾ 彼女の自己表現はカナダへの適応とともに進み、近代化されたロンドンとは大きく異なり、電化・上下水道整備が進んでいないイジーの故郷グラナイト・コーヴにさえ、「ここ大好き」と語るようになる。⁽²⁶⁾ そして、戦況の好転と終戦を描く第4巻『イジー——帰郷』(Izzie: Homecoming 2006)では、パトリシアはついに今も大好きだというイギリスに対して「でももうそこには属してないように感じるの」と語るようになる。⁽²⁷⁾ 以下に引用するとおり、ウィルソンは、高貴な人物と再婚を遂げた母から、父とともにカナダで生活することを願うパトリシアに届く「絶縁状」と、その手紙への彼女の反応をとおして、彼女のカナダ化を決定づける。

さて、少なくとも彼女とその新しい一流の夫は、時々怒ったり泣いたりしちゃうカナダ訛りの14歳の娘というお荷物がなくなって、二人の人生、ここぞとばかりに何でも好きにできるってわけよね。⁽²⁸⁾

母からの手紙とパトリシアのその手紙への反応は、くりかえしイギリスを厳格で階級制度が残り感情表現を認めない国として印象付ける一方で、対照的にカナダを、短期間に漁村の専業主婦からライン工、秘書、そしてマネージャー職を打診されるまでに昇進するものの再び漁村の主婦にもどろうとするイジーの母や、⁽²⁹⁾ 漁夫から海軍に志願し軍人となり、下士官 (petty officer) に昇格して帰還し、ふたたび漁夫にもどろうとしているイジーの父が体現する社会的流動性のある国として浮き彫りにする。⁽³⁰⁾ ウィルソンは、パ

トリシアが帰国し父とともに、1946年にカナダへの移民許可を待っている状況でシリーズを終わらせる。⁽³¹⁾ここに、時代設定や登場人物の人格形成に無視できない類似性をもつローラの日記のなかで骨組みの形でしめされた、「戦争 ⇒ 新環境への移転 ⇒ 葛藤 ⇒ 感情表現 ⇒ 新環境への順応」というパターンは、フル・スケールで完結を見てはいないだろうか。

ここまでの検証は、ウィルソンのイジー・シリーズが『13歳』中のローラの日記とのあいだに時代設定や登場人物の人格形成上の類似性のみならず、「戦争 ⇒ 新環境への移転 ⇒ 葛藤 ⇒ 感情表現 ⇒ 新環境への順応」というパターンも共有していることを明らかにした。このようにイジー・シリーズを、ウィルソンがローラの日記で提示した「原型」に加筆し、それを発展させる形で歴史物語として昇華させた作品であるとみなすことは、見当違いではないであろう。

III. 『オリバーの戦争』：ローラの日記の現代化と多義化

ウィルソンの戦争を取り扱う児童向け文学作品のうち、『13歳』中のローラの日記の発展形であり、「戦争 ⇒ 新環境への移転 ⇒ 葛藤 ⇒ 感情表現 ⇒ 新環境への順応」という基本的なパターンを共有していると考えられる作品がもう一つある。1990年代初頭のハリファックスを舞台とする『オリバーの戦争』(*Oliver's Wars* 1994)である。⁽³²⁾これまでに考察した『13歳』中のローラの日記ならびにイジー・シリーズが、いずれも第二次世界大戦を生きる少女を主人公にした物語であるのに対して、『オリバーの戦争』は湾岸戦争を背景に12歳の少年オリバー・コバック (Oliver Kovak) を主人公として書かれた作品である。本作品の主眼があくまで現代におかれていることは、湾岸戦争の風景、空爆、銃声やサーチライトという戦争の脅威が、つけっ放しのテレビや新聞というメディアを介して恒常的に生活背景に組み込まれていることから明白である。⁽³³⁾

しかしながら、ウィルソンは現代の湾岸戦争を、オリバーが同居することになった祖母との会話、そしてカナダでも最も歴史の古い地域のひとつであるハリファックスの街そのものを通して、過去の戦争の歴史にリンクしてゆく。ウィルソンは、他作品にも登場する歴史的エピソードを有意義に編みこむことにより、『オリバーの戦争』を彼女の既存の文学世界の一部として機能させているのだ。

オリバーの年齢は1990年に12歳であるからロリндаに近い。しかし、本作品は『13歳』の主人公を男性に置換した作品ではなく、むしろ現代の少年を用いてローラの日記を昇華させたものと考えた方が理解しやすい。二つの作品をつなぐのは次の段落で考察する物語のパターンの類似性だけではない。オリバーの転入先が、ローラとヒラリーも通ったタワー・ロード・スクール (Tower Road School) に設定されているのである。⁽³⁴⁾新しい

環境で緊張するオリバーは、1912年建造のハリファックスの旧タワー・ロード・スクールをモデルとする古い校舎を見て、⁽³⁵⁾ここで数えきれないこどもたちが学んできたことを知り、不思議な安心感を得、自らの生存の可能性を認める。このエピソードは、ローラの日記と『オリバーの戦争』の関連性を示すものとして重要であるので少し長いが引用する。

まだ不安だったけれど、彼にもこの学校が今まで行ったことのあるどの学校とも違うことぐらいは見てとれた。まず、それは古かった。タイルと金属と、プラスチックの代わりに、階段の手すり、長い階段のまわり、そしてあたりの窓やドアの無目には、つるつるに磨きあげられた古い木が使われていた。風変わりな小さな廊下や、思いがけないところにいずこへ続くかも知れぬ短い階段があった。それは不思議で見慣れないものだったが、どういうわけか暖かく、心やすまる感じだった。こどもたちがずっとずっと長い間この学校に来ていることがわかったからだ。そして彼らは生き延びたのだ。この学校に来ても死ななかったじゃないか。とにかく、即死はしなかった。彼はその考えににこにこした。⁽³⁶⁾

このように、半世紀を隔ててタワー・ロード・スクールへの転校生たちはつながれ、オリバーはウィルソンの文学世界の中を生きはじめる。

次に『オリバーの戦争』をローラの日記やイジー・シリーズと結びつける物語のパターン上の類似性を検証する。オリバーはロリンダのように歴史の中の戦争に触れるのではなく、むしろローラやイジーのように、自らが戦争を体験し、故郷のサスカチュワン州ムーズジョー (Moose Jaw, Saskatchewan) からハリファックスに転居し、転居先でヒラリーやパトリシアを喚起するワシントンDC出身の少年ガス (Gus Rogers) に会う。オリバーの父はカナダ陸軍の看護師、ガスの父はアメリカ陸軍の兵士であり、二人は父が中東に派遣されたため、縁故をたよりハリファックスにやってくる設定だ。先にハリファックスに移住していたガスによるオリバーに対するいじめは、他の物語中、英加の少女たちの間に当初みられた生育環境の違いを起因とする摩擦を極端に強調したかのようである。しかし、二人はこの敵対関係の中から互いに感情表現の方法を学び、苦しみや恐怖を分かち合うことにより相互理解へと向かい、ともに新天地へ順応していくのである。⁽³⁷⁾ここに他の物語においても見出された「戦争 ⇒ 新環境への移転 ⇒ 葛藤 ⇒ 感情表現 ⇒ 新環境への順応」というパターンが見られる。この「発達」パターンは他の物語では、主人公よりも外国からの疎開児童により強く見られたのに対して、『オリバーの戦争』ではアメリカからやってきたガスのみならず、カナダ国内でも地理・文化的に遠く離れた西部出身の主人公にも強くそのパターンを見出すことができる点は指摘されるべきであろう。二人が

物語の最後までには新天地の生活の価値を認め、本格的にハリファックスに引っ越してもよいと考えるように至る点では他の物語と同じである。⁽³⁸⁾

ウィルソンは、ひとりだけではなく二人の登場人物の新天地における適応過程を描くことにより、適応の媒介となる感情表現の重要性をより強く強調することができる。それは、ここでオリバーの学ぶ感情表現の手段が、他の二作品にも見られた声をあげて泣くことや手紙を書くことのみならず、絵を描くこと、レポートを書くこと、はっきりと相手に自分の気持ちを話すことなど、より多様に描かれていることからわかる。そして、先に考察した他作品同様、『オリバーの戦争』でもハリファックスの過去の爆発事故（1917年のハリファックス大爆発と1945年7月18~20日のベッドフォード火薬庫の引火事故）を引き金に、登場人物の感情の爆発、そしてその連鎖が描かれる。⁽³⁹⁾それはハリファックスに転入して以来、自己表現の方法を段階的に学び続けてきたオリバーが、祖父の教えてくれた爆発事故のエピソードを回想した後に起こる。第一にオリバー同様、長く自分の気持ちをとどめてきた祖母が、オリバーとの会話の中で、家族の秘密をオリバーに話すようになる。そして、それをきっかけにオリバーは自分の考えを抽象画、手紙（書き言葉）、そして口頭言語で表現することができるようになる。この手助けをするのが美術教師であることは象徴的である。⁽⁴⁰⁾さらに、自分の苦悩を語ることなく、そのフラストレーションをオリバーをいじめることにぶつけていたガスも、作品後半に戦場の父を襲った地雷の爆発、⁽⁴¹⁾そして何よりもオリバー自身のガスに対する感情の表出という「爆発」をきっかけとして、父の負傷、両親の別離、現在同居中のアルコール中毒気味で暴力的な叔父からの虐待など、自分の苦しい境遇をオリバーに、話し始めるのである。⁽⁴²⁾このオリバーの祖母から始まる「感情の爆発」の連鎖は、小さな火種から始まった爆発が、引火により新たな爆発を繰り返す物理的な爆発のイメージと絶妙に重なる。

本作品がローラの日記やイジー・シリーズから際立つ点は、感情表現の重視だけではない。ウィルソンは『オリバーの戦争』の原題において「戦争」を複数形（Wars）とすることにより、湾岸戦争という「軍事的戦争」とそれに伴う父の出征、転居を、それを取り巻く母親の失業と再就職、いじめ、祖父母の家での生活、苦手教科との対峙、自分を理解してくれない教師、そして自分自身など、オリバーの抱える多様かつ一般的な「戦争（戦い）」の象徴として打ち出すことに成功している。そしてこの操作により、『オリバーの戦争』は、過年により「昔話」に陥ることを回避する。このように、イジー・シリーズがローラの日記を歴史物語として書き増したものであるのに対して、『オリバーの戦争』はローラの日記のパターンをなぞりながらも、文脈を移動することにより、そこにあらわされる登場人物の発達のパターンの普遍化を試みた物語であるとも考えられる。

ウィルソンのその他の作品のなかにも、『オリバーの戦争』で見られるような、「日常

生活の戦争」を経験するこどもが、類似する発達のパターンないしはその変形パターンを経験する物語は存在する。本稿第I章で言及された『ふるさとをはなれて』や、北方を舞台にした児童向け問題小説『シャーラ』(Sharla 1997)、そして彼女の代表的短編集である『旅立ち』(*The Leaving* 1990)に収録された「わたしのいとこクラレット」(“My Cousin Clarette”)などである。⁽⁴³⁾『ふるさとをはなれて』はロリンダの父の病気、『シャーラ』は主人公の父の失業を「戦争」ととらえれば比較的容易にこのパターンに収まっていることが理解できるので、ここであえて考察しない。一方で「わたしのいとこクラレット」は、他の作品とは異なり読者をヤングアダルト層から大人に設定したクロスオーバー作品であるとともに、類型のパターンを途中まですすみながらも、その後半を反転させている点で興味深いので、最後にこの短編小説において、先のパターンがどのように展開されるのかを検討し論考を終えたい。

IV. 「わたしのいとこクラレット」：自己表現手段の獲得に失敗したケース

「わたしのいとこクラレット」は、1984年の12月にトロントの地下鉄で、主人公のヴィクトリア (Victoria) が美しく裕福そうないこのクラレット (Clarette) を見かけたことから、彼女と過ごした1954~55年へと記憶を巡らせる物語である。⁽⁴⁴⁾ 当時、11歳の少女だったヴィクトリアはイジーやロリンダ同様、サウス・ショアの小さな町ルーネンバーグ (Lunenburg) に住んでいたが、両親が離婚したアメリカ人のクラレットが静養のための安定した環境を求めて転入し、ヴィクトリアの部屋で約10か月を過ごすことになる。つまり、クラレットはイギリスからの疎開児童が第二次世界大戦を逃れてカナダに移転したように、両親の離婚という「戦争」を逃れカナダにやってくるのである。彼女は転入当時のイギリス人少女たちのように、大人や初対面の人物には、上品にそして寡黙かつ気丈にふるまう。しかし、一方で、クラレットはヴィクトリアや学校で親しくなった同世代者に対しては、本心を打ち明けることなしに、ただ自らのフラストレーションを発散するかのように陰険にふるまう、感情表現の未熟な人物としても描かれる。⁽⁴⁵⁾ これは、『オリバーの戦争』のアメリカ人少年ガスが幸せとは言えない生育環境の中で、他人に自分の不安を打ち明けることなく、クラスのいじめっことしてのキャラクターを作り上げていく様子と重なる。

しかし、「わたしのいとこクラレット」は、ここまで検討してきたウィルソン作品に共通する「戦争 ⇒ 新環境への移転 ⇒ 葛藤 ⇒ 感情表現 ⇒ 新環境への順応」というパターンを途中まで共有しながらも、最後の二つの過程で大きな相違をみせる。クラレットには、他のキャラクターに見られたような、「感情の爆発」もその後の自己表現手段の獲得を介した周囲との和解も起こらないのである。彼女の感情表現は不安や苦悩を打ち明け

ることなく、引越し当初のオリバーがそうであったように、ひとりでこっそり泣くレベルにとどまり、彼女は約10か月後にアメリカに帰国する直前まで、周囲の人々に心をひらくことも新環境に順応することもないままであり、帰国後は音信不通となる。⁽⁴⁶⁾ 当然、他作品が言及していた歴史的な「爆発」のイメージは本作品には現れない。

そして、自己表現方法の獲得に失敗したクラレットにウィルソンが用意した結幕は自殺である。クラレットは、物語の最後で1980年代のトロントに引き戻されたヴィクトリアの目の前で地下鉄のプラットフォームから投身する。「わたしのいとこクラレット」は、「戦争」に伴う移転と葛藤を介して自己表現方法を獲得してゆくという、ここまで検討してきたパターンの一つの変化形であり、先に検討した三作品と同列で読まれることにより、ウィルソンの文学世界における広い意味での「戦争」と、それを介した「自己表現」方法の獲得の重要性を強く伝える特に重要な作品と言えよう。

むすびにかえて

本稿は、バッジ・ウィルソンの作品のうち、軍事的戦争を背景とする児童文学作品『13歳 いつも一緒』、イジー・シリーズ、『オリバーの戦争』に着目し、そこに登場人物を取り巻く類似する物語のパターンを見出した。そして、『オリバーの戦争』にならい「戦争」の解釈を「日常生活の中の戦争」にまで拡大し、クロスオーバー作品「わたしのいとこクラレット」までを研究の範疇とし、ウィルソンの文学世界における「戦争」と、それを介して「自己表現」の手段を手に入れることの重要性を論じた。類型のパターンの作品を書き続ける作家に対して、批評家は商業主義や想像力の枯渇といった消極的な判断を与えがちである。しかし、自らの重要であると信じることを伝えるために、その危険を顧みずに書き続けるウィルソンの姿勢を筆者は積極的に評価したい。

註

- (1) 児童むけの絵本から大人のための短編小説集までを含む30を超える多様な書籍を出版しているウィルソンの近年の代表作は2008年に出版された『赤毛のアン』の続編『こんにちは アン』である。Lucy Maud Montgomery, *Anne of Green Gables* (Boston:L. C. Page, 1908); Budge Wilson, *Before Green Gables* (Toronto: Penguin, 2008). 『こんにちは アン』については筆者の以下の論文も参照されたい。「バッジ・ウィルソン著、*Before Green Gables*: アニメーション『こんにちは アン〜Before Green Gables』との相違点とその効果」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第9号: 135-48. なお、本稿中の英語文献の翻訳は特に表記がない限り拙訳。
- (2) Budge Wilson, in conversation with the author, 30 August 2011. エリスおよびマッケイの外国の紛争地域を舞台とする作品については以下の通り。Deborah Ellis, *Breadwinner Trilogy* (Toronto: Groundwood, 2001); Sharon McKay, *War Brothers* (Toronto:Penguin, 2009).
- (3) Budge Wilson, *Thirteen Never Changes* (Richmond Hill: Scholastic Canada, 1989).
- (4) Budge Wilson, *The Best/Worst Christmas Present Ever* (Markham: Scholastic Canada, 1984). 同シリーズは主人公の名前を借りてロリンダ・シリーズ (Lorinda Series) と呼ばれることもある。
- (5) Wilson, *Thirteen*, 5.
- (6) Wilson, *Thirteen*, 5. Janice Kulyk-Keefer, “‘Brightly, aggressively golden’: Verbal Agency in Budge Wilson’s *The Leaving*,” *Atlantis*, vol. 20, no.1 (Fall-Winter 1995): 195. この地域の文学の研究者であるキュリック・キーファーによれば、ウィルソンは「書くことを欲する女性」を描くこの地域のアングロフォンの作家としては、モンゴメリ以来だという。
- (7) *Thirteen*, 57-67.
- (8) *Thirteen*, 136.
- (9) *Thirteen*, 148-49. 作品の終わりにロリンダは母との会話の中で、ノーマンが海軍の軍人として参加した戦争から帰還したのちに、イギリスに渡り、すでに帰国していたヒラリーと結婚したことを知る。
- (10) *Thirteen*, 45-46.
- (11) Budge Wilson, *A House Far From Home* (Markham: Scholastic Canada, 1986), 8.
- (12) 原文は以下の通り。“Oh, Grandma,” she whispered, “stay nice to her, even if she’s a bit of a nerd.” She was remembering the first terrible weeks at Aunt Marion’s, when she and James had been all alone in the new world of Ontario. She remembered Mildred making fun of her Nova Scotia accent, her clothes, the ways she called her mother Mummy. See Wilson, *House*, 63-64.
- (13) Wilson, *Thirteen*, 58, 121-24.
- (14) 原文は次の通り。“Oh! That felt so good! I think I’ll have a big howl like that once a week for the rest of my life.” Wilson, *Thirteen*, 123.
- (15) *Ibid.*, 124. この爆発事故は本稿第II章で取り上げるイジー・シリーズ『イジー ——トロンゲートの猛威』で詳細される、1942年4月にベッドフォード湾で起こった火薬類を積んだ貨物船トロンゲート号の事故をモデルにしたものと思われる。Budge Wilson, *Izzie: Trongate Fury* (Toronto:Penguin, 2005).トロンゲート号の爆発事故を含む、ハリファクスの第二次世界大戦中の爆発事故については以下の書籍が詳しい。H. Millard Wright in cooperation with CFAD Bedford, *The Other Halifax Explosion: Bedford Magazine, July 18-20, 1945* (Halifax:H. Millard Wright, 2001).

- (16) アワ・カナディアン・ガール・シリーズについては、以下のウェブサイトが詳しい。Penguin Canada, *Our Canadian Girl*, 2001-2009, accessed 15 January 2012; available from <http://www.ourcanadiangirl.ca>. 2012年3月出版予定の拙稿「Our Canadian Girl Seriesに関する一試論」『北海道情報大学紀要』vol. 23, no. 2 (2012): 93-99. も参照されたい。
- (17) Budge Wilson, *Izzie: The Christmas That Almost Wasn't* (Toronto: Penguin, 2002). イジーの引っ越しの理由およびその過程については特に『イジー —— トロンゲート号の猛威』第6-46頁に詳しい。Wilson, *Trongate*, 6-46.
- (18) Wilson, *Christmas*, 2-7.
- (19) Wilson, *Thirteen*, 119; Wilson, *Christmas*, 75-87.
- (20) Wilson, *Trongate*, 10, 28-29. この物語は戦争を背景とした女性の自立の物語としても読めるのであるが、本稿の議論の中心はそこにはないので深入りはしない。ウィルソンがこどもを主人公としながら、主人公を取り巻く大人の物語を描くことを得意としていることについては、註(1)でも言及した拙稿を参照いただきたい。
- (21) 原文は“Both she and Patricia were unlike all the other students.” Wilson, *Trongate*, 59-60.
- (22) Wilson, *Trongate*, 59-66, 79-94.
- (23) *Ibid.*, 98-100.
- (24) *Ibid.*, 83.
- (25) Budge Wilson, *Izzie: Patricia's Secret* (Toronto: Penguin, 2005), 65, 76.
- (26) 原文は以下の通り。“I love this place.” See Wilson, *Patricia*, 76.
- (27) 原文は以下の通り。“But I just feel like I don't belong there anymore.” See Budge Wilson, *Izzie: Homecoming* (Toronto: Penguin, 2006), 58.
- (28) パトリシアの母からの手紙については第4巻第118-20頁を参照のこと。また、引用の原文は以下の通り。“Now, at least, she—and the new and distinguished husband—will be free to do absolutely anything they want to do with their lives—without the impediment of a fourteen-year-old daughter with a Canadian accent, who is inclined to get angry and cry from time to time.” See Wilson, *Homecoming*, 121.
- (29) Wilson, *Trongate*, 29; *Patricia's*, 17; *Homecoming*, 18-19.
- (30) Wilson, *Trongate*, 63; *Homecoming*, 125.
- (31) Wilson, *Homecoming*, 123-24.
- (32) Budge Wilson, *Oliver's Wars* (Toronto: Stoddart, 1994).
- (33) *Ibid.*, 17, 27-28.
- (34) Wilson, *Thirteen*, 45.
- (35) モデルとなったハリファックスのタワー・ロード・スクールの建物は、現在はハリファックス・グラマー・スクール (Halifax Grammar School) の校舎として使用されている。詳しくは隣接するセント・マリーズ大学のウェブサイト参照されたい。“Neighbourhood,” *Saint Mary's University*, accessed 14 January 2012; available from <http://www.smu.ca/whatsnew/neighbour/neighbourhood.html>.
- (36) 原文は以下の通り。“Although he was still uneasy, he was able to notice that this school was different from any he'd ever been in. For one thing, it was old. Instead of tiles and metals and plastic, it had a lot of smooth polished old wood on the banisters, around the long stairway, and surrounding the windows and transoms on the doors. There were odd little hallways and short unexpected staircases leading to unknown places. It was strange and unfamiliar, but somehow warm and comforting. You knew that kids had been coming to this school many years. And they'd survived. You didn't die from going to this school. Not instantly, anyway. He grinned at that idea.” See Wilson, *Oliver's*, 22.

- (37) Ibid., 22-93.ガスのオリバーに対するいじめは第4章から始まり、第13章まで続き、第13章の後半でついに和解する。
- (38) Wilson, *Oliver's*, 117, 97.カナダの東西の文化的相違については、東部アメリカ出身のガスよりもオリバーの方が地理的移動距離が長いことから察せられる。
- (39) ベッドフォード弾薬庫の爆発については、註11に記載のあるミラード (Millard) の書籍が詳しい。
- (40) Ibid., 50, 52-61.ウィルソンのクロスオーバー作品では美術教師ではなく、英語教師が感情表現の媒介としての役割を担うことが多い。前述のKulyk-Keeferの論文の他、次の論文も参考とされたい。John Noell Moore, "English Teachers, Mothers, and Metaphors," *The ALAN Review*, vol.23, no. 3 (1996):41-44.
- (41) Ibid., 86.
- (42) Ibid., 86-91.
- (43) Budge Wilson, "My Cousin Clarette," *The Leaving* (Toronto: House of Anansi Press, 1990), 97-109. Budge Wilson, *Sharla* (Toronto: Stoddart, 1997).
- (44) Wilson, "Clarette," 97-98.
- (45) Ibid., 104-108.
- (46) Wilson, *Oliver's*, 48; "Clarette," 108. なお、オリバーがこっそり泣くのは寝室ではなく、屋根裏である。